

令和5年8月31日（木）  
2学期始業式

## 学校長訓話

下村 昌弘



- 全校の皆さん、おはようございます。本日は2学期のスタート。また新しい節目を迎えました。こうした節目・節目を大切にすることがメリハリを生み、いわゆるPDCAサイクル（プラン・ドウ・チェック・アクション）をうまく回すことにつながります。
- さて、皆さんは夏休みを振り返っていかがだったでしょうか。
- 1学期の終業式で私は「ことばの働き・思うこと・考えること」の話をしました。この夏休み、本を読み、課題に向き合い、授業の予習・復習をとおして、作業ではなく、ことばによる思考を大事にする取組がどれくらいなされたでしょうか。
- これから2学期の長丁場、皆さんがもっとも輝き出す113日間が始まります。
- そこで今日は、あらたなスタート・節目として原点に立ち返る話をしたいと思えます。
- 夏休みを含めて、これまでたくさんの同窓生の方々と話をしてきましたが、OBの皆さんの本校に寄せる思いは並々ならぬものがありました。
- 皆さん自身もこの学校に大きな期待をもって入学してきたでしょうし、今は武高生としての誇りをしっかりと持ってくれていると信じています。また、卒業後はきっと多感な青春時代を過ごしたこの学校を忘れないでいてくれることを願っています。
- そもそも学校は、その土地、その土地の“知”の象徴であったし、これからもそうあるべきだと思います。
- 武雄という土地は、全国的に見れば、一地方都市にすぎませんが、武雄というコミュニティがこれまで歩んできた道は極めて斬新であり、革新的なことが多かったと思います。
- 現市長の小松政さんは教育を大切にする政策や新幹線をはじめとする交通網の整備、新庁舎の開設、駅前開発、大学の誘致など、全国的に見ても先進的なまちづくりを推進されています。
- 遠く遡ってみると、幕末の武雄領もそうでした。
- この銅像をご存じでしょうか。文化会館の北東にある河畔公園に建てられている銅像です。地球儀を胸に抱いて未来を見つめる第28代武雄領主の鍋島茂義像です。
- この写真だとその迫力が半減しますが、御船山を背景としたこの像の実物は圧巻です。まるで茂義さんに大きな翼が生えたように見えます。実際はもっと迫力があるので

ぜひこの場に立って確かめてほしいと思います。今朝はこの御船山に虹がかかって見えました。



- ときに、本校は「TAKE OFF (TAKEO FUTURE FRONTIER)」、「武雄高校は未来を開拓する」をスローガンにしています。
- 武雄はこうした開拓者・挑戦者の DNA を元来備えた土地なのであり、武雄高校はその志を正面から引き受ける学問の府であることが求められているのです。
- こういうわけで、本校は、既成の概念を超えて新しい価値観を志す学校でありたいし、あるべきだと考えます。
- そのためにも皆さんにはもっともっと主体性を磨いてほしいと思います。教えられることに慣れすぎてはいけません。「出藍の誉れ」という言葉あります。皆さんはやがて先生方を越えていく存在です。先生方もそういう思いで教壇に立たれています。皆さんはもっと自分の足で歩くことを意識していい。



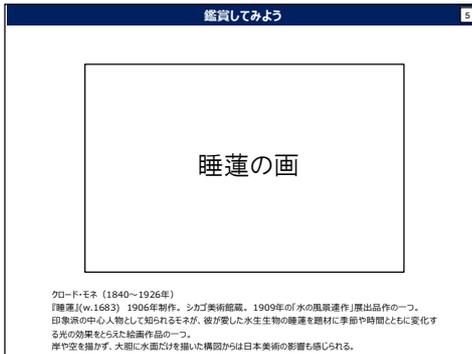
- そこで、改めて学校教育目標をみんなで共有しましょう。TAKE OFF 手帳を携帯している人はその 3 ページを開いてください。そこには学校目標がバージョンアップする前の文言のまま掲載されているので、このスライドの赤文字の箇所を少し書き足しておいてください。
- 「高い志と未来を切り拓く力を持ち、多様な人々と協働しながら、持続可能な社会の実現を目指して、地域や国際社会が抱える課題解決に向けて主体的に行動できる人間性豊かな人材を育成する」。
- これを分かりやすく図式化したのが真ん中の図です。中央の縦の列にある黄色い四角の部分「何をすべきか」という行動、皆さんの動きを示しています。
- 課題を設定し、一人一人自分で考え、一緒に議論し、その解決を図ろうというのが一連の流れです。
- 気づいた人もいるかもしれませんが、まさにこれは今求められている「探究」そのも

のです。これは総合的な探究の時間や“まちづくり参画事業”などの自発的な校外活動においてはもちろんですが、実は各教科の勉強も、学校行事も、学校目標のもとに行われるものである以上、この一連の流れを基本的なスタイル、大切にすべき型として、繰り返し、繰り返し経験し、鍛えなければならないということになります。

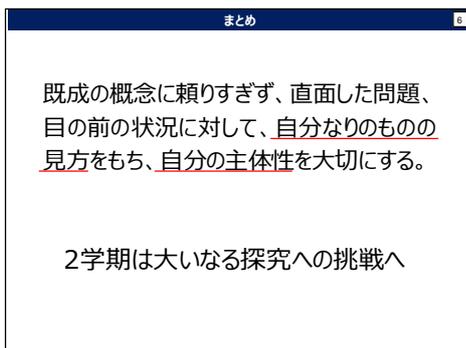
- 出発点である課題設定における“課題”には、自分が最も興味・関心のある教科・学問、スポーツ、芸術・文化、生徒会活動、学校行事、まちづくり、グローバルな問題、SDGs、なんでもいい、自分が自分であり続ける、自分が一番自分らしく思える分野を設定し、そこにこだわり熱中することです。
- 課題設定は 1 回で終わることはありません。いろんな場面で何回も何回も設定しなおし、個別・協働の取組を行きつ戻りつしながら、何度も何度もこのサイクルを経験することが大切なのです。
- TAKE OFF 手帳はその取組の記録でもあります。メモを取ることは思考の射程を必ず広くしてくれます。その意味で若いうちはメモ魔になってほしいと思います。
- 2 学期はこうした取組、チャンスにあふれています。その都度、その都度、大いにチャレンジして、そして失敗してほしい。そしてまた立ち向かう。勉強にしても、学校行事にしても、部活動、生徒会活動、校外活動にしても、たくさんのトライ&エラーをする時です。そういう 2 学期にしてほしいと思います。



- 今度はこのグラフを見てください。1 学期の終わりに全校の皆さんにオンラインで行った調査結果です。
- 実は、これは世界 9 か国で行われた青年意識調査というもののうち、社会や国に対する意識調査と同じ質問項目を使いました。対象となる年齢層や集計方法が実際とは異なりますので、一律に比較することはできないが、大まかな傾向を把握することはできます。
- そこで特筆すべき点を 2 点あげましょう。
- まず 1 点目は、左から 2 つ目の項目「自分は責任ある社会の一員だと思える」と答えてくれた本校生の割合は 74.8%。これは日本の平均をはるかに上回っているし、他国に迫る勢いです。
- もう一つは右から 2 番目、「自分の国（地域）に解決したい社会問題がある」と答えた生徒の割合は 78.9%。日本平均をはるかに超え、他国と互角の数字です。
- これは武雄高校生のポテンシャルの高さを表していると思う。実にスバラシイ。社会に対する意識の高さ、この強みをさらに磨き上げ、主体性を発揮してほしいと願っています。



- では最後に、一枚の絵を紹介しましょう。
- これは 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて活躍したフランスの画家、クロード・モネの『睡蓮』という作品です。
- あまり時間はかけられませんが、しばし心静かにこの画を鑑賞してみてください。  
(しばし沈黙)
- さて、皆さんはこの画を見て何を感じ、何を考えたでしょうか。
- 「かえるがいる」。4 歳の男の子がこの画を指差して言ったそうです。
- かえる…、皆さんには見つけられたでしょうか。
- その時、そばにいた大人は「えっ、どこにいるの」と聞き返しました。すると、その男の子はこう答えたそうです。「今、水にもぐっている」。
- 実はこの画にはどこにもかえるは描かれていません。これを子どもじみている、バカバカしいと思うのでしょうか。私はこのエピソードから、子どもの発想の純粹さ、柔軟さに改めて感心させられます。
- 皆さんに「静かにこの画を鑑賞して」と言いましたが、画を見る時間より、下の解説を読む時間の方が長かったのではないのでしょうか。私たちは、題名や制作年、解説などを読んで、なんとなくその画を理解したような気になるものです。



- 既成の概念に頼りすぎず、直面した問題、目の前の状況に対して自分なりのもの見方をもち、自分の主体性を大切にする。これが今日、私が皆さんに伝えたかったことです。
- 2 学期はたくさんの活動が待っています。皆さんの大いなる探究への挑戦を期待します。頑張ってください。